

# 木曾川

木曾川文庫は治水の資料館。  
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、  
これからの治水を皆様とともに  
考えていきたいと思います。  
冬号は木曾川河口に広がる弥富町から、  
干拓の歴史を中心に紹介します。  
今回から伊勢湾台風をシリーズで  
特集します。



INDEX.....

## ふるさとの街・探訪記<sup>〈弥富町〉</sup>

開拓の歴史を重ねた海拔ゼロメートルの水郷地帯。

## AREA REPORT

伊勢湾台風を乗り越えて、  
実りの時を迎えた鍋田干拓事業

## 気ままにJOURNEY

柔らかな冬陽が注ぐ、かつての海の町

## 歴史ドキュメント

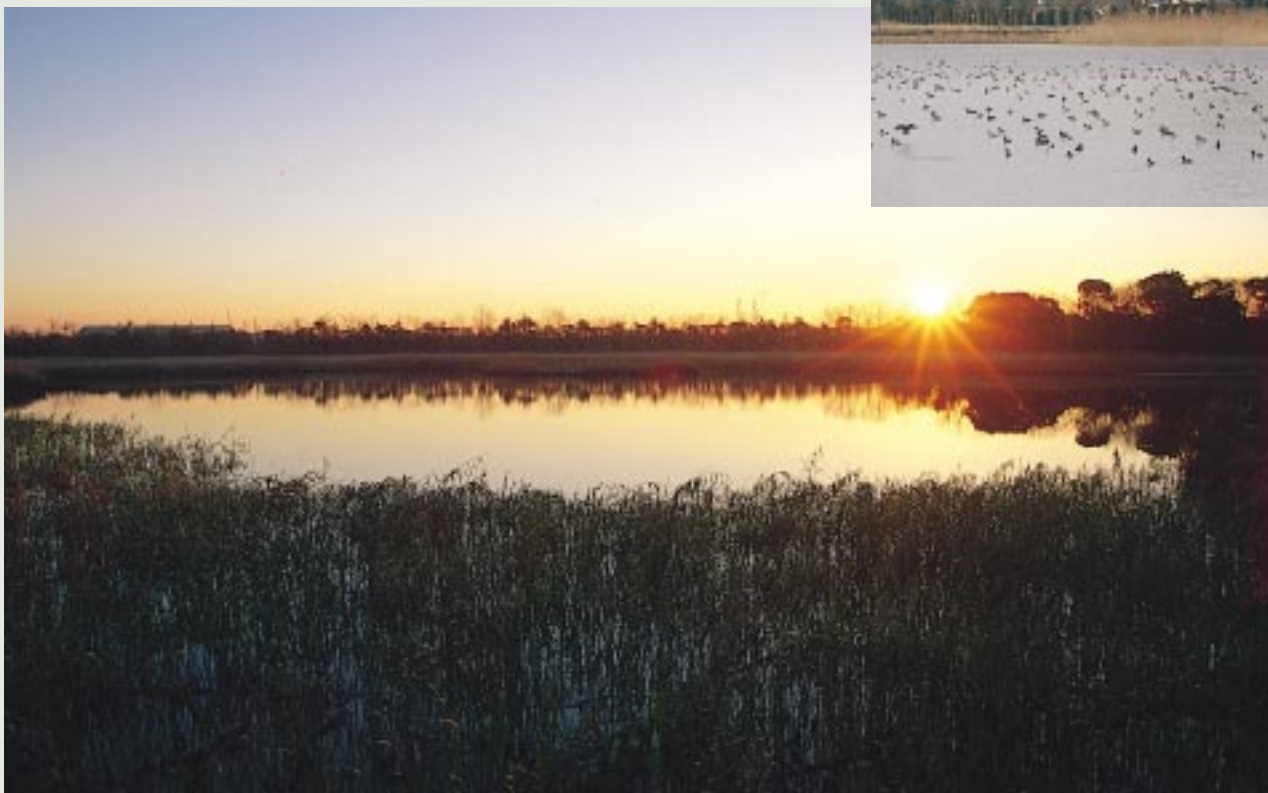
台風災害史上に名を残す伊勢湾台風

## TALK&TALK

座談会：鍋田干拓入植者が語る伊勢湾台風

## 民話の小箱

八穂地蔵



# ふるさとの街・探訪記



五明村・赤津亀貝新田・小島新田（岐阜県歴史資料館蔵）

関ヶ原合戦以降、尾張藩領となった弥富町域には、鯛浦村・五明村・五三三村・荷之上村などがあり、新田の開発に従って、数々の新田村が形成されていきました。この新田開発はいわゆる輪中の形成のこと、海岸堤防や河川堤防を築き、周囲に堤防をめぐらした輪中式の大新田開発には、大資本と多くの労働力が必要で、個人単位では進められるものではなく、その多くは豪農・豪商による資本投下の元で実施されました。



五明輪中家並（屋敷入口）

- (一) 郷村起し新田  
村々がそれぞれ話し合い、その村の地先、飛び地を開墾。  
主として、市之江島の村々。
- (二) 町人起し新田  
豪農・豪商・浪人が開墾。  
又八・佐古木・極楽寺・草平・中河原・中山・与蔵山・森津・鎌島・芝井・稲元・稲荷・稲狐・大谷と加藤輪中  
地仲間起し新田  
豪農・豪商が株組織で資金を出し合い開墾
- (三) 地仲間起し新田

- 前ヶ須・平島・川原欠・松名・寛延・島名・狐地・稻吉・三福・六野・上野・操出・木広の各新田
- (四) 藩主見立て新田  
藩主導で豪農、豪商が資金を出し開墾  
八穂新田

(一) の場合は近世初期までの開発で、いわゆる郷村が力をもっていた時代に実施されたもの。先述した服部正友らが再開墾を進め、尾張藩初代藩主徳川義直の時代には、服部家が義直の鷹狩りの勢力を移めたことから、周囲に広がる韋州の開発許可を得、市之江島新田を開墾したと記録されています。

こうして一部の開墾地主は巨額の利潤を得ましたが、土木技術が未熟な近世の開発は危険を伴った。また、費用面でもリスクを背負った事業でもありました。というのも、開墾経営には敷金や地代金、築造費用の他、堤防・橋などの修繕費用、田悪水松樋の付替えなど、莫大な費用を要するだけでなく、せつかく開墾された新田も、毎年のように襲来する台風や長雨により海岸堤防や河川堤防は決壊し、十年以上の歳月と資本をかけて開墾された新田はもとの泥海に化すこともしばしばでした。

その復旧には多大な費用を要したため、地主が費用捻出不能となり亡所となったり、多額の借金を返済するための土地担保として、他の豪商や豪農へ所有権が異動するなど、新田は変遷を繰り返していきました。



寛延新田家並

## 筏川の水運と前ヶ須渡船

慶長一二年（一六一〇）、名古屋城の築城の木材の大部分は、木曾の山に求められました。木曾の山は、近世初頭に需要が高

まった木材の一大供給地だったのです。当時木曾の山から名古屋に送られてきた木材は、年間約百万本。一本ずつ管流しされた木材は木曾川の錦織湊（現在の八百津町）で筏に組み木曾川を流送し、熱田の白鳥の貯木場に送られたが、木曾川下流からの近道として重要な水路となったのが筏川です。

当時の筏川は木曾川水系の佐屋川の支流で、佐屋川は弥富町域の五明で二つに分流し、西は境川、東は筏川と呼ばれていました。筏川の名は、筏流しの重要な流路であったため名づけられたとが、その渡船場であったため須のふたつや湊は、筏流しの要地としても栄え、また、旅慣れた人々や商人は、東海道の七里の渡し（桑名から熱田の宮を結ぶ海上七里のコース）を利用せず、この渡船場を利用したことから、前ヶ須は宿場町として大いに発展しました。

## 弥富の金魚

弥富の金魚のはじまりは江戸時代、郡山の金魚商人が東海道熱田の宮へ行く道中、前ヶ須の宿場でタメ池を作り、金魚を休ませたことと端を発します。というのも、金魚は元来揺れに弱く、船での旅は大敵で、前ヶ須での水替えや休憩は大切な作業の一つでありました。その美しくかわいらしい金魚の姿を見た寺子屋の師匠権十郎が、ぜひにと購入し飼育したことが、弥富金魚のルーツ。明治に入ってから採卵とふ化に成功、木曾川下流の水郷地帯という地理的環境を背景に、金魚養殖としては日本一の地場産業に成長しています。



弥富金魚市場風景

平成四年、弥富の鯉はスペースシャトル「エンター」に日本初の宇宙飛行士毛利衛さんとともに乗り込み、平成六年には弥富の金魚が日本人の女性宇宙飛行士向井千秋さんとともに乗り込んで、宇宙酔いの原因と治療のために貢献しました。

## 快速で潤いのある町づくりを目指して

弥富町の発達を牽引したのは、交通網の充実です。明治一八年五月には関西鉄道徳島〜前ヶ須間（現JR関西本線）が開業し前ヶ須駅が開設、同年一月には笠島前ヶ須〜桑名が開業し前ヶ須駅は弥富駅と改称、これを皮切りに、JR関西本線、近鉄名古屋本線、名鉄津島線など、鉄道網が次々に整備されました。その一方、昭和八年に国道一号の尾張大橋が、昭和九年には伊勢大橋が開通し、戦後には国道三三号などの道路網も充実、昭和五〇年には東名阪自動車道の弥富インターチェンジも開業しています。

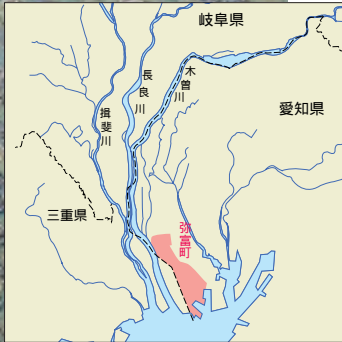
こうした交通網の整備を背景に、昭和三八年から一九九九年の工期で当町地先と隣接する飛鳥村地先に造成された地域に、名古屋西部臨海工業計画が策定されました。この事業により工場誘致やベッドタウン化が進み、以後海部南部水道などの公共施設の増設や道路の改修、舗装などが行われ、従来の水郷地帯の景観が大きく変貌しました。現在では、近鉄弥富駅橋上化事業も完成し、駅周辺に重点を置いた都市整備や機能の充実、南部臨海地域には公害を出さない都市型工場を誘致し、既存工場については公害防止対策として企業内緑地、緩衝緑地帯、公園などの環境整備を図っています。

### 参考文献

- 『弥富町誌』 弥富町発行
- 『踏青夜話』 彦坂登喜一・大島静雄発行
- 『やとみ』 弥富町教育委員会発行
- 『広報やとみ』 弥富町発行
- 『ふるさとマガジンやとみ』 弥富町発行
- 『愛知県地名大事典』 角川書店発行

# 開拓の歴史を重ねた海拔ゼロメートルの水郷地帯

開拓の歴史を重ねた海拔ゼロメートルの水郷地帯。木曾川河口にひょうたん状に連なる弥富町は、かつては伊勢湾の海底。木曾川の堆積土砂は州を形成し、葦におおわれた州は海に浮かぶ小島となり、やがては田んぼとして開拓されました。弥富町の歴史は、まさに開拓の積み重ね。現在では、愛知県下屈指の農業生産地帯として、また、日本一の金魚生産地として、成長を遂げています。

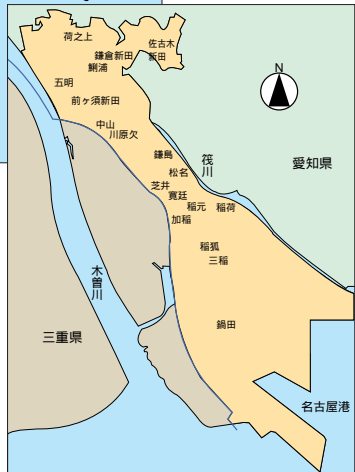
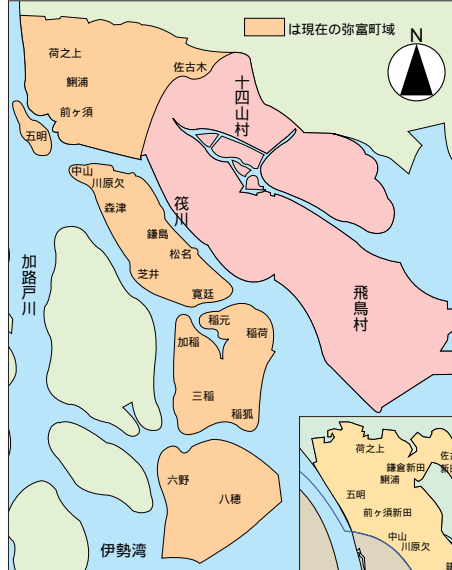


弥富町の航空写真

## ●●● 弥富町のあらまし ●●●

愛知県の南西端に位置する弥富町は、大都市名古屋から二〇km圏という近さにありながら、豊かな緑と水に恵まれた水郷地帯です。西は鍋田川跡を挟んで三重県桑名郡

近世の集落分布図



現在の弥富町

木曾岬町、木曾川を隔てて同県同郡長島町北は立田村・佐屋町、東は十四山村・飛鳥村に接し、南には伊勢湾が広がっています。

町の全域は海拔ゼロメートルの低湿穀倉地帯。周囲は河川堤防及び海岸堤防によって囲まれた田畑が多くみられます。水系としては、木曾川、筏川、善太川、市江川、宝川などの大小河川があり、集落内には網の目のように用・悪水路が通じていたため、古くから陸運よりも水運が発達。舟は水郷の生活に欠かせないものでした。

水量・水質とも恵まれた自然環境は、高生産農業地帯として、また金魚生産日本一として、全国にその名を馳せています。

弥富町の名は、明治二年市制町村制施行の際、地域がますます栄えるようにと命名されたもの。昭和三〇年四月、弥富町・鍋田

## ●●● 干拓の始まり ●●●

村・市江村の一部を合併して現在の弥富町が誕生しました。

古代の弥富町一帯は海底。律令時代（七〜八世紀）の伊勢湾の海岸線は、桑名から養老付近を経て、美濃赤坂に達し、岐阜の近くから小牧山、守山、熱田と結び、大高付近から知多半島につながっていたと想定されています。つまり、それより南は汪洋たる大海原。この中、中島、枇杷島、津島、長島など、葦におおわれた大小の島々が点在していたといわれています。

弥富町域の名が歴史上の文献に登場するのは平安時代末期、一二世紀初頭のこと。木曾川の支流一之江川が伊勢湾に流れ込み、川の運んできた土砂があたりどちらに堆積、自然堤防（小島）がいくつか浮かんでいました。当時の荘園領主たちは、そこへ農民を送り込んで開墾を重ね、弥富町域では市江八郷と呼ばれた五之三、荷之上、鯛浦が開かれました。この一帯が旧弥富町の市江村にあたること。その後、荘園制度が崩壊し、村々の力が強くなると、自分たちの村の周辺を徐々に開墾

## ふなつこの街・探訪記

鎌倉時代に入り、土木技術も進歩し、杵も築造されるようになると、泥におおわれた低湿地でも堤防で囲んで、田畑を広げることができるようになりました。こうして、前ヶ須・川原久・西中地・東中地などの新田が開拓され、五明島にも人が住むようになりました。

## ●●● 服部左京進と一向一揆 ●●●

織田信長の長島一揆討滅戦は元龜二年（一五七二）と天正元年（一五七三）のこと。当時、海西郡（現在の海部郡の西部）一帯を統治した豪族は服部左京進。室町幕府の守護斯波の臣下であり、一向一揆の指導者であった服部左京進は、守護斯波氏にとって代わり尾張統一を目指した織田信長を逆臣と呼び、徹底抗戦の構え、鯛浦に本拠を置き、戦いの火ぶたは切って落とされたのでした。一方の信長軍は六万余の大軍で水陸両面作戦を展開。この一帯はことごとく兵火にかかり、服部左京進も討死、住民は離散し、一時は無住の地となっていました。

天正四年（一五七六）、焼け野原の無人島には服部左京進の流れを汲む服部正友が農民を引き連れて再帰し、荷之上を中心に、田を起こし用水を整備するなど、復興に尽力しました。服部正友は荷之上の中興の祖と呼ばれています。

## ●●● 近世の新田開発 ●●●

長い戦国の時代も終わり大名が領地を確立すると、目録以外の領地の拡大、即ち、新田の開発が競って行われるようになりました。



鯛浦城址

## 壊滅的な被害を与えた伊勢湾台風

昭和三四年九月二六日に襲来した伊勢湾台風は、この地に壊滅的な被害を与えました。

この時鍋田の海岸堤防（高さ六・三メートル）七〇五〇メートルのうち、なんと五三五〇メートルが決壊、残ったのはわずか一七〇〇メートルでした。

台風襲来当時の入植は、一六四戸で家族を含めて三三八名、そのうち、二三戸が一家全滅し、一三三名（入植者四八名、同家族七三名、同居人十二名）が死亡、つまり半数近くがその尊い人命を失ったのでした。

鍋田干拓地の被害の特徴は、若い入植者と新婚早々の女性が多かったこと。台風の前か七日前、豊橋の訓練所から来たばかりの七期生の犠牲者もあり、彼らの多くは十七歳から二十歳までの二キビの残るような青年ばかり。干拓地南端の海岸堤防近くの宿舎に入植した彼らの被害は甚大だったのです。また、入植者はその年、結婚した人も多く、新婚はやほやのほとんどの花嫁さん一六名が犠牲に。妊娠四か月以上の女性三八名もの命も失われたのでした。

昭和三八年、伊勢湾台風の被災者の霊を慰めようと「伊勢湾台風殉



鍋田干拓堤防災害風景



災害風景

難の塔」を建立さらに昭和四四年の「伊勢湾台風復興十周年事業」では、「限らない新築土建設を目指し、入植者の心のよりどころとして、今後いつそ一致団結し村づくりを精進する」と、神社の慰霊碑・慰霊観音も建立されました。



鍋田神明社

## 伊勢湾台風後の復旧事業

昭和三四年九月二六日に襲来した伊勢湾台風は、干拓建設工事が約九三%完了していた鍋田干拓に壊滅的な被害を与え、工事着工以来十億円余りを費やした成果は水泡に帰しました。

被災後直ち復旧工事は進められ、応急仮締切工事は昭和三五年四月に完了し、同時に本復旧工事に着手、三八年三月完了、干拓付帯工事も昭和三九年度をもって完了しました。この間の復旧工事は、二億四〇六四万余円、こうして再建された干拓地に住宅が建設



弥富町の医療活動（「次代にひきつぐあの教訓 / 伊勢湾台風」より）

されるのを契機に、大字三稲子稲山の地名が付けられること。ところが、かつて鍋田村と呼ばれた地区でありながらその地名が残らないことや、伊勢湾台風で広く知られた鍋田の地名を残したいという入植者の希望を町議会に認めてもらい、昭和四一年度大字鍋田と名乗ることとなりました。



潮止工事



応急仮締切竣工式風景

## 《木曾川用水事業》

二〇周年を迎えた木曾川総合用水事業。昭和五二年、木曾川用水が通水を始めてから昨年で二〇周年を迎えました。この事業の一環として整備されたのが、濃尾第二地区の海部幹線水路です。これは濃尾第二地区（三重県桑名郡を含む下流地帯）の灌漑用水と三重県の都市用水及び愛知県工業用水を送水するために木曾川左岸に建設された用水路です。

この水路は、明治二〇年から始まった木曾三川下流改修（明治改修）によって廃川となった佐屋川の代用水路である佐屋川用水路敷を通過するものであり、旧佐屋川用水路は排水路も兼用。この流域の排水対策も必要であったため、用水路の右岸側に併設して排水路を設け、完全に用排水分離を実現しました。なお、併設排水路は下流部で筏川に接続しており、筏川の水質浄化が問題となっていたため、常時においても排水が筏川に流入しないよう筏川左岸側に専用の配水管を埋設し、伊勢湾へ直接排水する対策も講じられました。

なお、三重県の用水施設として、弥富町の五明地先に弥富揚水機場も建設されました。このように、弥富地域の農業用排水系統はその内容を大きく変え、ほぼ満足のできる状態に改善されました。また、これまでの弥富町の用排水の中心的役割を果たしてきた筏川は、現在、その役割を終えています。



弥富揚水機サージタンク（調圧水槽）

### 参考文献

- 『木曾川水系農業水利誌』（社）農業土木学会発行
- 『鍋田干拓事業概要書』農林省名古屋農地事務所
- 『鍋田農業災害復旧事務所発行』
- 『鍋田干拓二〇周年記念誌』
- 『鍋田干拓三〇周年記念誌発行委員会発行』
- 『弥富町誌』弥富町発行

# 伊勢湾台風を乗り越えて、 実りの時を迎えた鍋田干拓事業



現在の鍋田干拓地

## 鍋田干拓のおいたち

愛知県海部郡弥富町地先の現在の鍋田干拓は、海部郡の最南端、西は、三重県に隣接する東は名古屋に広がる臨海工業地帯につながる干拓地、約八四三km<sup>2</sup>の農地です。戦後の混乱の中で緊急食糧増産対策として干拓が実施されましたが、この地の干拓はそれより約一六〇年前、天保八年（一八三七）、八穂、稲山上野新田として開発されました。稲山については、六野とも呼ばれていました。

しかし、この干拓地も収穫を十分上げることができないうちに度重なる水害で破壊され、地主たちも所有権だけを残して耕作を放棄し、干拓地も土所（地元用語で干拓された土地が水害等によって荒らされ、耕作不能地として放置されているところの意）になってしまいました。

この泥海で付近の漁民は海苔養殖をはじめ、また潮の干満を利用してハゼやボラの漁場ともなりました。その後、地主間による復旧の経過計画（安政四年・一八五七年）が進められたり、資本家たちによる干拓工事（大正時代）が始められましたが、いずれも複雑な所有権や漁業権、資金繰りなど関係から、実現に至りませんでした。

## 鍋田干拓計画

昭和二〇年、緊急開拓事業実施要領が閣議決定され、同事業の一環として約十町歩の干拓を国営または県営事業として実施することとなり、鍋田干拓も国営事業として取り上

げられることとなりました。

農林省は運輸省と協議し湖面干拓は農林省、海面干拓は運輸省に委託して行うこととしています。同年、鍋田には運輸省から現地に技術者が乗り込みましたが、干拓にあたっては次のような問題が横たわっていました。

- (一) 干拓地のほとんどが民有地であり、その所有者は十一人に及んでいる。
  - (二) 満潮時に水位があることを利用する定置漁業が愛知県により認定されている。
  - (三) ノリ漁業が盛んである。
  - (四) 付近の漁民が入り込んでボラその他の漁業をやっている。
  - (五) 亡所のうちでも、標高の高い箇所（地元では霞山という）では霞を作っており、当時は相当な収入源となっている。
- こうした問題の解決は至難であり干拓は難局を迎えましたが、干拓職員の熱心な説得、積極的な調査活動は実を結び、昭和二三年、ついに干拓工事は実施されることとなりました。

## 干拓事業の概要

農地造成、食糧増産、失業救済を目的とした鍋田干拓事業は昭和三年、本格的な干拓工事を開始、昭和三年には潮止めを行って陸化を実現し、用排水施設及び干拓造成工事を昭和三年三月までに完了する予定で進めていきました。

## 干拓地入植

鍋田干拓の入植者の条件は原則的に三〇歳

区分	被災前の計画 (鍋田地区)	災害復旧後		
		計	第1地区	第2地区
耕地	500.9 ha	314.60 ha	314.60 ha	— ha
堤防敷	28.0	41.63	22.86	18.77
道路敷	22.5	21.80	18.80	3.00
水路敷	41.0	43.96	37.01	6.95
その他、宅地	46.4	211.24	24.17	187.07
計	638.8	633.23	417.44	215.79

区分	河川堤	海岸堤	滞止堤	船留東西堤	船留正面堤	計	潮止	築堤用土
伊勢湾台風前の干拓建設施工事業量	1,727m	4,590m	725m	—	—	7,042m	1ヶ所 200m	外海より浚渫船にて堤塘敷に直接排送する。
災害復旧計画施工事業量	1,991.8m	4,359.8m	—	381.5m	314.1m	7,047.2m	第一145m 第二60m	全左

までの独身者で、家を継ぐ可能性の低い二・三男が主でした。

入植者は愛知県内だけではなく、県外からも地域を定めて同時募集、県外からの入植者は長野県五戸が一番多く、次いで山梨県、岐阜県と続いています。

第一期生の入植は昭和三〇年四月五日。愛知県農村建設青年隊に入って一年間、当時豊橋に所在した開拓訓練所と現地での訓練を終えることを条件としていました。

干拓地の入植は昭和三一年から三五年までに九期に分けて行われました。

鍋田干拓の始まりは江戸末期。豪農や豪商の資本投下により開拓されましたが、度重なる風雨により、もとの泥海に。本格的な干拓事業開始は昭和二三年。農地造成、食糧増産、失業救済を目的に、国営事業として実施されました。しかし、昭和三四年の伊勢湾台風により、壊滅的な被害を受け再び泥海に。昭和三五年から着手された復旧事業により、緑豊かな水郷地帯として再生しています。

## 蓮如さん

- 四月下旬 -

前ヶ須の蓮如堂で蓮如上人の命日の前後に行われる行事です。農家の仕事が忙しくなる時期に、多くの人々の楽しみとして続けられています。当日は、道路が歩行天国となり、綿菓子や金魚すくい、輪投げなどの店がたくさんです。境内では瀬戸物や植木などの市もでて、にぎわいをみせています。

## ミス弥富金魚コンテスト - 春 -

地元の人々がいかに金魚を大切にしているか、あるいは愛着をもっているかの証明が、ミス弥富金魚コンテストです。ミス弥富コンテストと並んで、町内の人気イベントで、毎年多数の応募者があります。



きんちゃん

弥富町のシンボルマーク

## 弥 富 町 行 事

やとみ春まつり.....	4月上旬
健康まつり.....	10月上旬
秋まつり.....	10月第1第2日曜日



公共交通機関利用  
JR名古屋駅 弥富駅17分  
近鉄名古屋本線名古屋駅 弥富駅13分

## 気ままにJOURNEY



服部家住宅 (重要文化財)

王祭りの市江車は、信長の侵攻で中断の憂き目に。この市江車を復活させたのが、かの服部正友です。以後今日まで、市江車は絶えることなく、天王祭りの先達をつとめています。  
天王祭りとのつながりを物語るもう一つのオブジェは「おみよし松」です。

その昔、前ヶ須の木曾川の河岸には津島神領の御葎場があり、神葎を刈って津島へ送っていました。この葎(葦と同じ)は天王祭りの御葎船の材料、祭品をのせた御葎船は天王川に放流する儀式もありました。その御葎船が流れ着いた平島新田では、天王縁結びの地として松を植樹、以来「おみよし松」と呼ばれ、約三五〇年の歳月を経た今も見事な枝ぶりをみせています。おみよし松は、弥富町の文化財天然記念物に指定されています。



おみよし松

伊勢湾台風後、驚異的な復旧をみせた鍋田弥富野鳥園



弥富野鳥園の内景

干拓の南東、上野地区には愛知県弥富野鳥園があります。ここは伊勢湾台風後の復旧事業として整備された公園、台風のために広大な葎原、沼地が変わってしまったこの地区が水鳥の貴重な生息地であることから、農林省は鳥類保護区の造成を決定、昭和四十七年に、鍋田東干拓二一六haが弥富野鳥保護区として設定され、昭和五〇年、野鳥園が開園したのです。

大小二つの池は、葎やススキなどが生い茂る草原に囲まれ、外側にはサザンカ、ネズミモチなど、野鳥の餌になる実をつける木を植えるなど、野鳥の生息にはふさわしい環境が整えられており、バードウォッチャーにとっても野鳥にとっても、まさに自然の聖域。どんよりと雲がたちこめる冬空に鳥たちは羽を広げ、野鳥のさえずりは、風景に優しさを添えています。  
特に冬はバードウォッチングに最適なシーズン。シベリアから多くの冬鳥が飛来し、マガモ、ヒドリガモ、ホオジロ、オナガガモなどが餌をついばみ、羽を休めている光景に出会ふことができます。  
バードウォッチングは朝に限る。そんな常識はここでは不要。早々と朝食を終え、柔らかな冬陽が差し込む昼間、池でのんびりと遊ぶ鳥たちを楽しむことができるからです。本館三階の望遠鏡をのぞけば、そこは野鳥の楽園。羽をつくり、餌を求め、今まさに飛び立つ鳥たちをながめている間に、夕日が風景をオレンジ色に染め上げていました。

# 柔らかな冬陽が注ぐからての海の町

モンペ姿で道行く農家のおかみさん。筏川に釣り糸をたれる子どもたち。ゆるやかに流れる川面には、柔らかな冬陽が注ぎ、翼を休めたマガモは、うたた寝を楽しんでいる。かすかに潮の香りを運ぶ風が、ここが海の町であった日を、物語っているのであらう。遠く鈴鹿山脈を望む広い大地に、冬の日がゆっくりと通り過ぎてゆく。

## 日本で一番低い関西本線弥富駅

JR名古屋駅から関西本線を利用して七分あまり。ゆるやかなブレーキとともにすべりこんだ駅は、日本でも一番低い弥富駅。海拔マイナス0.9mとは、さすが海を開拓した水郷地帯です。そもそもこの鉄道の開通は明治二十八年。伝馬船や四ツ乗船が木曾川を往来し、桑名湊まで渡船が就航していた時代のこと。この駅周辺の前ヶ須は東海道の宿駅として、木曾川の渡船場として、にぎわっていた宿場町。郡役所や警察署、郵便局がひしめき、また弥富の特産金魚の生産地として、この地方の一大中心地として栄えていたのです。

弥富駅、旧名前ヶ須駅の開業は、そんな繁栄があったからなのでしょう。ほんのり冷たい潮風が、かつてここが海の町であったことを教えてくれます。

## 郷土の横綱大錦大五郎

弥富町のご自慢といえば、宇宙まで飛んだ弥富の金魚と大錦大五郎。大錦のあざやかな取り口は、今でも語り継がれる弥富町初、愛知県初の伝説の横綱です。



大錦

全国でも有数の野鳥の宝庫といわれる弥富野鳥園の夕陽

大錦の本名は山田吉三郎。明治一六年三月二〇日に弥富町稲元の山田松次郎氏の二男として生まれました。小さい頃から力持ちで「米俵をまるで手まりのように扱った」「六歳の頃、相撲をとらせば一七人とり抜き優勝をして村人を驚かせた」などのエピソードは数知れず、「稲元の金太郎さん」と呼ばれ、その名は広く知れ渡っていました。

念願の相撲界入りは一九歳の時、関西相撲の朝日山親方に、大錦大五郎と命名してもらいました。大五郎が横綱となったのは大正七年、三七歳のこと。平成の世の相撲界で活躍する貴乃花が二歳で横綱になったことと比べれば遅過ぎる玉座ですが、それこそ不撓不屈の闘志と、弥富町民に流れる開拓者魂のなせる技。苦しい修業にも負けず、二八代の横綱の座を獲得したのでした。横綱になった大錦は、毎年夏、稲元の実家に帰り、木曾川の河原で大相撲を興業して故郷に錦を飾りました。稲元の彦九田神社には、昭和八年に寄進されたという石灯籠が今も残されています。



大錦寄進の石燈籠

## 白文鳥発祥の地

真っ白な羽根にピンクのくちばし。手軽な愛玩動物として人気を博している白文鳥の発祥の地は、ここ弥富町。今から一三〇年ほど前に突然変異で生まれたのが、始まりとされています。ではなぜ、かわいらしい白文鳥が弥富で生まれたのか、歴史をひもといてみましょう。

昔、弥富町に住んでいた大島新四郎のところに、尾張藩のお城に奉公していた八重女という娘が嫁いできました。八重女は、よく気が

きいて働き者だったことから、お城で世話をしていた桜文鳥のつがいをお祝いにいただいたき、大切に育てていました。



日本一の生産を誇る弥富の白文鳥

その桜文鳥は卵をたくさん産みヒナをかえしましたが、明治の初め頃、そのヒナの中に真っ白な毛の文鳥が、羽澄していたのです。ところがその白い文鳥はエサも食べずじ〜とくさくさい声で鳴くだけ。心配した八重女は寝る時も一緒に世話を続けて大切に育て、二代三代と時間をかけて丈夫な白い文鳥が産まれるようになったということです。

こうして、弥富町から産まれた白い文鳥は人々に珍重され、全国にその名が広まるようになりました。

弥富町の又八神社境内には、白文鳥発祥地の記念碑が建ち、毎年七月十日には文鳥供養を行っています。

## 服部家住宅とおみよし松

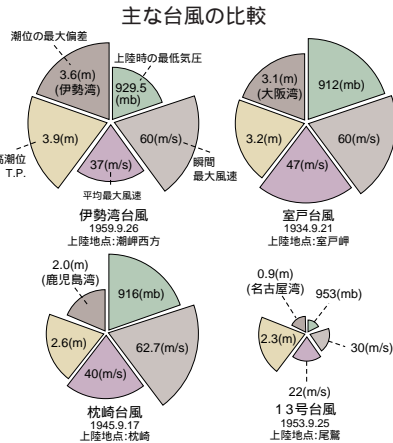
どっしりとした風格をたたえる長屋門、どこまでも続く白い土塙。築後四百年を経た荷之上の服部邸は、国の重要文化財にも指定されている由緒ある館。「尾張名所図説」にも、「その家は天正年中に建てしままなり」と記されているほど、愛知県でも有数の古い建物です。

この服部家は織田信長の戦火で壊滅した荷之上の中興の祖服部正友の末裔。自ら村長となつて荷之上の再興に力を注いだ服部正友には、もう一つのエピソードがあります。

天下の川祭りでは知られる津島神社の天王祭りはこの地と深い関係にあり、市江の楽車船も参加していました。しかし、津島天

の上昇に加え、伊勢湾口より湾口に向けて波の吹き寄せが生じ、午後九時三十分には高潮は記録的な値をもたらした。この異常潮位により、海岸堤防や河口付近の河川堤防はいたるところで決壊、伊勢湾沿岸地方では未曾有の大災害となりました。

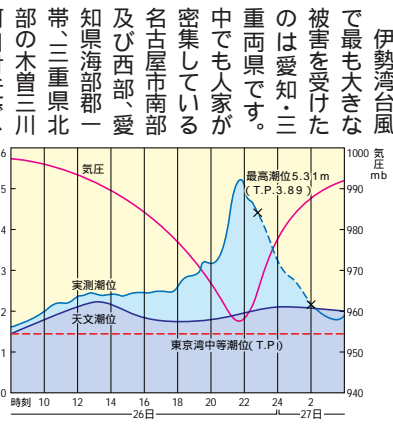
## 伊勢湾台風の特徴



伊勢湾沿岸地帯、渥美半島沿岸地方に大災害をもたらした台風の、気象学的及び地理学的な特徴は、次の通りです。

- (一) マリアナ発生から上陸までわずか六日間であり、中心気圧が非常に早くしかも深く発達したこと。
- (二) 発生初期から上陸直前まで非常に強い中心勢力を維持し、中心気圧は本土へ上陸した台風の観測記録値として、昭和九年の室戸台風、昭和二〇年の枕崎台風に次いで、史上三番目であった。
- (三) 暴風圏が非常に広大な超大型台風で、本州南方海上を北上する頃には、最大風速毎秒七五m、風速毎秒二五m以上の暴風圏が直径七〇〇kmであったこと。
- (四) 本州付近の停滞前線が台風の接近とともに活発となり、各地の大雨をもたらしたこと。
- (五) 上陸後も勢力は衰えず、毎時六五kmに近い速度で駆け抜けたこと。

## 伊勢湾台風の被害状況



伊勢湾台風で最も大きな被害を受けたのは愛知・三重両県です。中でも人家が密集している名古屋市南部及び西部、愛知県海部郡一帯、三重県北部の木曾三川河口付近で、異常潮位のためにいたるところで堤防が決壊し、一瞬にして泥水の下となり、その惨状は目を覆わせるものがありました。この地区は木曾三川のデルタ地帯にあり、海抜ゼロm地帯と呼ばれるほど全国でも有数の低平地帯でした。

- (六) 伊勢湾の左側(西側)という伊勢湾及び渥美湾沿岸地方などにとって、高潮の吹き寄せ効果の高まる最悪のコースを通ったこと。
- (七) 台風経路の特徴は、九月一五日以降は南北方向に速度分布が大きかったこと。

## 伊勢湾台風の被害状況 (続)

また、災害の特徴をみると河川の洪水だけによる災害と比較して次のような点で相違がみられました。

- (一) 浸水範囲が極めて広範囲で渥美半島から紀伊半島までのほとんどの海岸が浸水した。
- (二) 内陸部への到達限界は海抜一m前後の三角州地帯で、それより内部にはほとんど被害がなく著しい対照をなした。
- (三) 高潮の速度が極めて速く、このため、家屋の倒壊、流失が目立ち、海岸の貯木場付近では、流木による人的被害が著しかった。
- (四) 高潮による堤防決壊口より海水が干満に応じて出入りしたため、地盤の高さが満潮位以下の地域では長期間に渡って浸水した。
- (五) 全般に浸食作用が著しく、堤防決壊口付近では堤防の内側に落堀をつくり、その周辺に堤防の土が堆積した。落堀は極めて深く、鍋田干拓地では一〇mに達するものがあり、長島町では六m位のものが多かった。
- (六) 名古屋以西の水田地帯では、高潮及び干満による耕土の流失がめだつた。
- (七) 海水の浸水した範囲、特に干拓地では塩害が著しかった。

	死者(人)	行方不明(人)	負傷者(人)	被災世帯数(人)	住家(戸)		
					流失	全・半壊	浸水
愛知県	3,168	92	59,045	173,786	3,194	120,383	116,391
三重県	1,246	27	4,625	67,411	12,192	5,208	79,865
岐阜県	86	18	1,708	15,912	113	16,251	10,915
計	4,500	137	65,378	257,109	15,499	141,842	207,171

伊勢湾台風による一般被害

(「伊勢湾台風災害史 / 昭和37年3月建設省発行」より)

昭和三十四年当時は敗戦の混乱は収まりをみせていたとはいえ、まだまだ物資が不足がちな時代。ましてや、テレビや電話も各戸には普及してはおらず、従って、情報の収集や伝達も現代のように迅速にはできませんでした。そんな時代の背景も、被害を大きくした原因の一つであったといえましよう。

### 参考文献

- 『木曾三川高潮対策事業 / 高潮堤防緊急高上工事誌』建設省木曾川下流工事事務所発行
- 『輪中と高潮 / 伊勢湾台風の記録』伊藤重信編著 三重郷土資料刊行会刊
- 『桑名市史』桑名市発行
- 『伊勢湾台風三〇年』伊勢湾台風三〇年事業実行委員会
- 『伊勢湾台風復旧工事誌』建設省中部地方建設局

## BOOK LAND

### 輪中と高潮

伊勢湾台風の記録  
伊藤重信編著  
三重県郷土資料刊行会刊

今は亡き編著者は、三重県長島町出身。住居全壊、家財流失という被害にあいながらも、災害の後始末、復旧作業とともに、長島町を中心に災害現場を丹念に調査。その一方、災害に関する文献、記録を広範囲に渡って収集・研究し、まとめあげた一冊である。内容は長島町・木曾岬村の輪中の記録のすべ、輪中と干拓新田地域の災害の相違など。本題が示すように、輪中における高潮災害を知る貴重な一冊である。





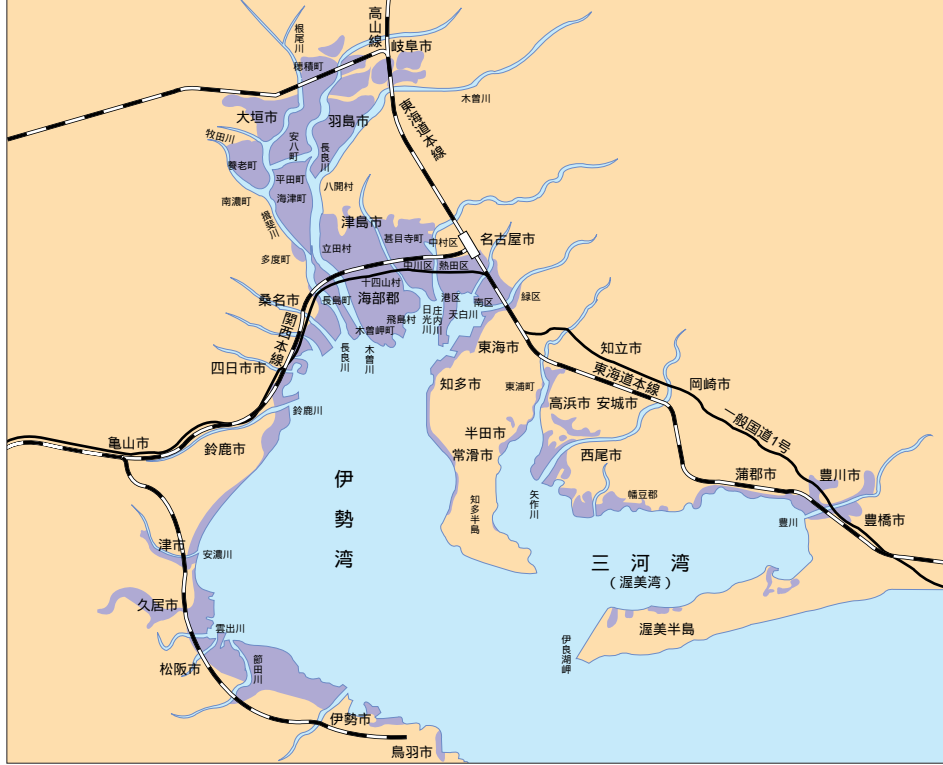
特集

# 伊勢湾台風

第一編

# 台風災害史上に名を残す伊勢湾台風

昭和三四年九月二六日夕刻、紀伊半島に上陸した伊勢湾台風は、未曾有の大被害をもたらした。ただでさえ勢力の強い台風を増幅させたのが、気圧低下と強風による高潮。伊勢湾及び渥美半島沿岸に、壊滅的な打撃を与えたのでした。その台風から来年は四十年となります。今回から伊勢湾台風をシリーズで特集し、治水と防災の今を考えます。



伊勢湾台風による浸水状況図

## 伊勢湾台風に学ぶ

毎年、お定まりのように暴風雨を巻き起こす台風は、恐ろしい水害と水の恩恵を合わせもつ自然現象。俳句の季語にされるほど、日本の秋を象徴する風景の一つです。そして、その自然現象をなだめすかし、抑え込み、時には裏切られながらも、共存を目指したのが、人間の歴史。治水と防災はいつの世も、いつの時代も、永遠のテーマだといえます。

そもそも台風とは、北太平洋で発生した熱帯性低気圧のうち、最大風速が毎秒一七二m以上に発達したもので、七月から一月にかけて最も多く発生し、年間発生数は平均して二七個。このうち三個前後が日本に襲撃して風水害を起す。直径数百から数千kmの異常風域の渦巻です。

台風の災害史の中でも、最大級の規模だったのが昭和三四年に襲撃した伊勢湾台風です。全国で五、〇八九人の尊い人命と家屋や田畑を一瞬に奪い取り、戦後の槌音響く日本に大打撃を与えたのでした。

実りを育み、命の源泉である水も、一瞬にして命をのみ込んでしまふ自然の脅威だからこそ、伊勢湾台風を風化させることなく顕彰し、水との共生を図ることこそ、現代人の課題だといえましょう。

## 伊勢湾台風の経過と規模

伊勢湾台風は、国際的にはペラ台風（北半球での呼称）と呼ばれた台風で、わが国では当初、一五号台風と呼ばれていました。これは、従来第二次世界大戦後のアルファベット順の女性名を、昭和二八年から発生順に番号で区別するようになっていたため。

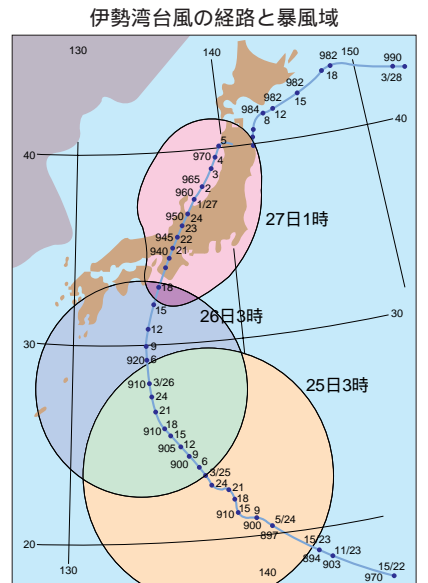
しかし、伊勢湾沿岸を襲ったその規模と災害が気象史上稀な大型高潮台風であったので、昭和三四年九月二〇日、気象庁は台風一五号を「伊勢湾台風」と呼ぶことに決めました。

台風一五号の発生は、昭和三四年九月二一日、マリアナ諸島の東にあった、弱い熱帯低気圧は急速に発達、二二日には台風一五号と名づけられました。この台風が潮岬西方に上陸したのが九月二六日一八時過ぎで、図で示すように高山市を午後一時に通過、東海圏一帯は、巨大な台風の爪にたたきのめされたのでした。では、台風襲来までの経過を振り返ってみましょう。

九月二三日：午後三時には硫黄島の南南東約六〇〇km、最大風速毎秒七五mの超大型台風となり、北上しはじめた。

九月二四日：熊野地方は三日夜から四〇〇mmの豪雨によって約一億円の被害を受けた。

九月二五日：午後五時、名古屋地方気象台は東海四県に大雨注意報を発令、ラジオニュースは、海上は朝から陸上は明昼頃から暴



(原図 名古屋地方気象台 伊勢湾台風気象概報)

風圏に入るといつ台風情報第一号を出した。九月二六日：午前六時には名古屋地方気象台が、午前七時三〇分には名古屋地方気象台が、風雨注意報を発令。午後一時には紀伊水道の南約二〇〇kmの海上に迫り、熊野灘・遠州灘では大しけとなった。また、東海地方の海岸でも毎秒二〇m以上の強い東風が吹き、岐阜・三重両県の山岳部ではこの時まで一五〇～二〇〇mmの雨量を観測。午後六時には潮岬の西約一五kmの地点に上陸、台風の眼の中に入った。この頃すでに、紀伊半島内、四国東部、東海地方が風速毎秒三〇mの暴風圏内に、上陸後も勢力は衰えることなく、平均時速六五kmの猛スピードで、午後七時には奈良・和歌山の県境、午後八時には奈良県中部、午後九時には鈴鹿峠を通過、一〇時に岐阜市の西北に達してなお規模は衰えず、中心気圧は九四五hPa、暴風は岐阜で平均風速毎秒三二m、名古屋は三七m、瞬間最大風速四五・七mという名古屋地方気象台開設以来の記録を示した。

九月二七日：午前〇時、依然衰えをみせぬ台風は富士の東を通り、午前一時、日本海へ駆け抜けた。この時の中心気圧は九六〇hPa。潮岬上陸以来わずか六時間あまりで中部地方を縦断、その後、佐渡、秋田を通過する頃にはその勢力も弱まり、北海道の襟裳岬を経て千島南東海上に去った。

この台風は伊勢湾の西側を通過したため、暴風域は伊勢湾に集中、低気圧による水面

たので、命だけは助かりましたが。



吉兼郁雄さん

**吉兼**：当時はラジオも電線から引つ張ってくるものだけ。今のようにはポーター風の状況はわからない。ましてあの日の昼間は晴れていましたから、あんな凄い台風だとは、誰も予測できなかった。そうこうしている間、多分、夕方の六時過ぎだったと思つ。一気に高潮に襲われて、キヤーという妻の悲鳴を聞いたのが、最後の言葉でした。妊娠七か月の妻とは、それっきりです。

**三浦**：あの年の春、私も小学校四年の娘と二年の息子、そして家内を長野から呼びよせましてね。伊勢湾台風の日、丁度土曜日でした。で、下校した娘に「小学校で台風のこと何か言っていないかったか」と聞きましたが「何も」といっておったんで、夕方を括っていたんです。けど、夕方から夜になるにつれ風雨が猛烈に強くなり土壁自体が振動する様になった。兩戸の補強をしていると高潮が一気に襲ってきた。台所におった長女の「キヤー」という悲鳴が最後の言葉でした。妻も子ども二人も高潮に呑まれて。

**吉兼**：流木と一緒に旧堤防の笹藪のところまで流されました。まるで吹き寄せられるように、十何人の人々が流れ着いていた。そんな人々とまんじりともせず、朝を迎えました。そりゃ寒かったです。

よ。流木で全身怪我だらけでしたし。  
**三浦**：私も流木と一緒に流されましたが、幸い、近くの農家の二階に避難することができました。そこで、おじいさんの羽織を借りたんですが、それでも寒くてふるつとつた。今から思えば、私が運よく助かったのは、パンツと半袖シャツという軽装だったから。遺体捜索で亡くなった方をみると、兩合羽をしつかり着こんでいたんですが、あの重装備で、波に巻かれてしまったんでしょうね。

**亀嶋**：なんといっても入植者は若くて屈強な男どもですから、助かった率も多かったんですが、女性や子どもは弱いぶん犠牲になりましたね。まして、当時は新婚早々に妊娠していらつしやる女性も多かった。身動きもとりにずらかったんでしょうね。

**牧本**：私はたまたま、実家に家内ともども里帰りしていました。丁度その頃、秋祭りがあつて、嫁さん連れてこいつていうことだね。向こうで伊勢湾台風のことを聞いたんです。しかし今のように情報が発達していない時代です。状況はつかめませんでした。高山線も止まっていたし。2、3日後、何とか愛知県庁を訪ねると、入植者名簿の僕の名前のところに「らしい」と書いてある。生きているらしいとね。それから遺体捜索の日々ですよ。

**亀嶋**：私は当時農協の組合長をしていました。堤防の脇に小屋みたいな事務所



亀嶋庄平さん

があつたんですが、台風が来るから交代で当番をしなきゃといつてことで、昼間は、事務所に詰めておつたんです。で、夕方になって交代でご飯を食べようといつて、自宅に帰った時、六時過ぎですか。雨も風も強くなり、玄関から後ろまで風が吹き抜けて、家具もたんすも木の葉のように飛んでいってしまった。こうなれば、家にいても外にいても同じだといつて、家内や近所の方と一緒に避難しようと、みんなで堤防を目指したんですが、運よく私たち夫婦が堤防に上りつめたところで高潮がきた。私たちの後に続いた二組の夫婦の奥さんだけが高潮に呑まれてしまったんですね。気の毒だったのは、私の代わりに農協の事務所に詰めていて、命を落とされた方々。

**伊藤**：伊勢湾台風の後、逃げ出したいとも思いましたが、被害者の方々を思うと、とてもしゃないが私だけが逃げることができなかった。復興に力を尽くそうとね。

## 開拓の夢を、今一度

**三浦**：そりゃ、復興の兆しも見えない時には転業したいと、正直、思いました。でも、私が逃げ出したんじや、仏も浮かばれないと思ひ直して、それからですよ。もう一度、ここで頑張ろうと。まあ、開拓者魂が蘇つたんですね。

**亀嶋**：台風の年の年末からです。復興のための陳情が始まったのは、丁度、甚目寺での避難所生活を終え、鍋田での新生活をスタートさせた時のことです。この頃から、農協の役員が交代で東京へ陳情に行きました。当時は今と違って、比較的偉いさんにも会うことができました。まず、農政局長

に会つて、そこで当時の農林大臣の福田超夫さんにも会うことができました。鍋田への視察を約束してくれました。吉兼：それで、宅地とかブロック住宅が整備されたのが昭和三五年だったかな。



牧本松夫さん

**牧本**：昭和三五年の四月に第一・第二潮止工事が完了して、本格的に農業を始めたんですね。

**伊藤**：まあ、お互い帰るところはないし。  
**三浦**：意地があつた。負け犬にはなりたくなかつた。

**吉兼**：高度経済成長という時代も後押ししてくれました。  
**三浦**：大都市に近いという土地柄もあつたんでしょう。伊勢湾台風さえなければ、開拓民としては本当に恵まれた生活でした。

**伊藤**：「開拓者に下子なし」。つまり、入植者は苦労ばかりで、といわれましたが、報われた人生だと思つています。

**亀嶋**：「災害は忘れた頃にやってくる」じやありませんが、私たちの中でも台風に対する恐怖は薄らいでくる。こんな話、子どもたちにしても「またか」と笑われるばかりです。

**吉兼**：でも、こういう機会に、もう一度台風の脅威を振り返り、防災を考えることも大切なことですね。

**亀嶋**：今日は、本当にありがとうございました。  
**全員**：ありがとうございました。



# 民話の小箱

## 八穂地蔵 はっほ

八穂新田は現在の鍋田干拓の一部にあたる場所。

開拓の始まりは、江戸末期の天保年間（一八三〇～四四）、木曾郡代山村甚兵衛が、中山道木曾谷十一宿の財政難を救うために、尾張藩の協力を得ての新田開拓を思いついたたつたのでした。しかし、尊皇攘夷に揺れる幕末のこと。

尾張藩には開拓するだけの資金力はありません。

そこで工事を近在庄屋の大河内庄五郎や服部弥兵衛に依頼し、尾張藩の豪商からも出資させ、工事は始まりました。

ところが、八穂は海面に孤立した章に覆われた中洲です。

工事期間中にも暴風高潮でせつかくの堤防も流され、多くの犠牲者をだしながらも、二年の歳月をかけたついに完成

新田の安全と五穀豊穡を願った服部弥兵衛は、

津島社を勧請し、地蔵堂も堤防近くに建立しました。

そんな願いも空しく、幾度もの大洪水に見舞われ、

安政元年（一八五四）の大地震では、堤防や田んぼが沈下、

応急復旧工事のいかにもなく、翌年の暴風高潮で、

ほぼ全農家が海に吞まれ、三〇人の死者をだしました。

近在の庄屋たちは、復旧に東奔西走しましたが、

折からの世情不安と資金調達難から復旧を断念、

せつかくの新田も、もとの泥海と化したのでした。

時代は下って明治八年のこと。

富島新田の漁師が漁に出かけ海に網を投げたところ、

海に引き込まれるほどの重い手こたえを感じました。

「ムム、なんだこれは」

そつ思いながらも、網を引きあげると、

全身傷だらけのお地蔵様ではありませんか。

「これは、きつと八穂新田のお地蔵様にちがいない。

あの高潮に吞まれながらも、よくそつ無事で。

これも神様のご加護のおかげだろう。ありがたいことだ

お地蔵様を急いで引き上げた漁師は、

村の庄屋様と相談して、富島新田の鍋田川の堤防沿いに、

地蔵堂を建立し、大切に供養しました。

この地蔵堂は、八穂新田の地蔵として長らく安置されていましたが、

伊勢湾台風後の鍋田干拓復旧工事も近い昭和三八年、

鍋田の氏神である鍋田神明社の一隅に建立した地蔵堂に移り、

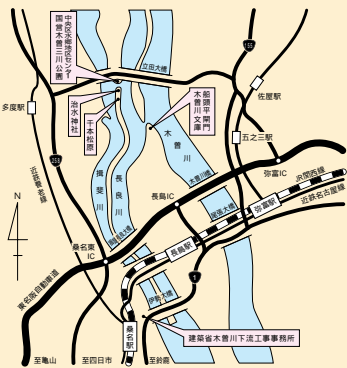
やっと、ふるさとに戻る事ができたのです。

幾度も水難をくぐり抜けてきた

お地蔵様の供花は、今日も絶えることがありません。



## 木曾川文庫利用案内



《開館時間》午前9時～午後4時30分

《休館日》毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》無料

《交通機関》国道1号線尾張大橋から車で約10分  
名神羽島I.Cから車で約30分  
東名阪長島I.Cから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・  
木曾川文庫  
〒496 愛知県海部郡  
立田村福原  
TEL(0567)24-6233



## 編集後記

輝かしい初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。  
木曾川文庫では、木曾三川流域の歴史や治水に関する展示と、機関誌「KISSO」での情報発信を行なっています。  
当館の役割の大きさ並びに収納情報をより多くの方に知っていただけるよう、インターネットのホームページを本年度中に開きたいと考えています。

また、昨年9月発刊の全国の文庫・文学館50ヶ所を紹介している新潮社「文学館探索」榎原浩者に当館が掲載されていますので一読願えればと思います。

Vol.25制作にあたっては弥富町役場ならびに伊藤さん、吉兼さん、三浦さん、亀嶋さん、牧本さん、弥富野鳥園の皆様にご協力をいただきました。ありがとうございます。

表紙写真

上左:弥富町が誇る金魚

上右:伊勢湾台風殉難の塔

下:弥富野鳥園からの日の出